今週の為替相場見通し（2021年11 月29日）

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	（円）		113.05 ～ 115.52	113.50	112.00 ～ 115.00
ユーロ	（ドル）		1.1186 ～ 1.1333	1.1315	1.1100 ～ 1.1400
（1ユーロ=）	（円）		127.79 ～ 129.60	128.42	126.00 ～ 130.20
英ポンド	（ドル）		1.3278 ～ 1.3449	1.3330	1.3200 ～ 1.3400
（1英ポンド=）	（円）	*	150.73 ～ 154.22	151.23	149.90 ～ 152.40
豪ドル	（ドル）		0.7113 ～ 0.7273	0.7114	0.7000 ～ 0.7320
（1豪ドル=）	（円）	*	80.48 ～ 83.25	80.76	79.30 ～ 83.00

（データ）先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1．米ドル

市場営業部　為替営業第二チーム　小林 元子

（1）今週の予想レンジ：　112.00 ～ 115.00 円

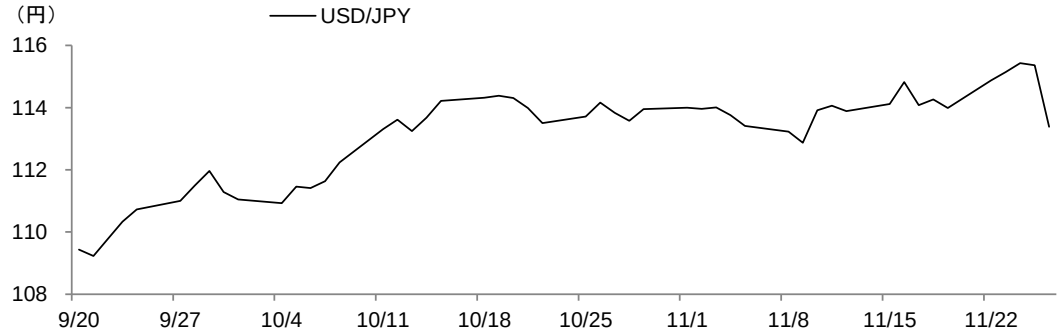
（2）ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は週半ばに年初来高値を更新した。週初22日、114.15円付近でオープンしたドル/円は114円台前半での小動き。一時113.92円まで下落も、海外時間に入り米10月 中古住宅販売件数の良好な結果やパウエルFRB議長再任決定を背景に米長期金利が急上昇。ドル/円も115円に迫る水準まで急伸した。23日、ドル/円は東京市場が休場の中、前日からのドル買いが継続し、115円を突破。その後、欧州圏でのロックダウン懸念から114円台半ばまで下落も、原油価格高騰を受けた米金利の上昇に再び115円台前半まで値を戻した。24日、ドル/円はポジション調整の動きが散見され一時114円台後半まで値を崩すも、米10月 個人所得をはじめ好調な米経済指標とFOMC議事要旨のタカ派な内容から米国時間に115.52円をつけ年初来高値を更新した。25日、ドル/円は米国が感謝祭で休場の中、115円台前半で小動き、終日を通して動意に乏しい展開となった。週末26日、オープン後に一時115.11円をつけるも、その後は南アフリカで確認された新型コロナウイルスの変異株に対する警戒感から日経平均株価が大幅に下落する中、東京時間ではドル/円は114.48円まで下落。海外時間に入っても売りが加速し、米利上げ期待が大幅に後退したことも相まって、ドル/円は一時113.05円まで値を下げ、その後はやや買い戻されて113.50円で越週した。

今週のドル/円は米利上げ期待に一喜一憂する展開となる相場を予想する。先週は米経済指標の良好な結果や、パウエルFRB議長の再任により金融緩和縮小政策が予定通りに進むことが期待されて、米金利が上昇し、ドル/円は週半ばに一時2017年1月19日以来の高値となる115.52円を付けた。週末26日（金）に南アフリカで確認された新型コロナウイルスの変異株にリスクオフの動きとなり、米金利は大幅に低下し、ドル/円は一時113.05円まで下落。直後の反応としては世界経済の回復が実現困難との見方が広がり、リスク回避の動きで円買いが進んだ。一方で世界的にインフレ懸念が持ち上がっており、今週は米国において雇用統計などの重要経済指標の発表が予定されており、強い結果となれば再び米金利が上昇し、ドル買いの展開を予想。一方で弱い結果となった場合、米利上げ観測がより後退して、もう一段とドルが売られる展開となろう。重要指標は12月1日（水）に米11月 ADP雇用統計、米11月 マークイット米国製造業PMI、2日（木）に米11月 新規失業保険申請件数、3日（金）に米11月 雇用統計の発表が予定されている。

（3）先週までの相場の推移

先週（11/22～11/26）の値動き：　安値 113.05 円　高値 115.52 円　終値 113.50 円



（資料）ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部　為替営業第二チーム　山口 朋子

(1)今週の予想レンジ:　1.1100　～ 1.1400　　126.00　～ 130.20　円

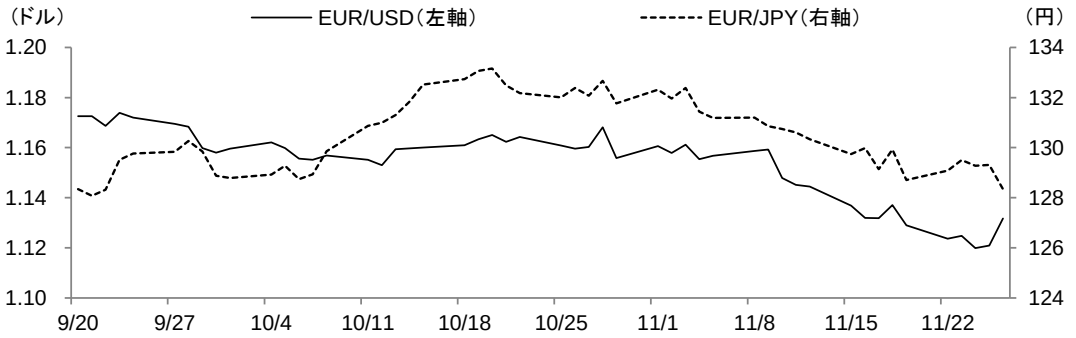
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は週後半にかけて下落し、年初来安値を更新。週初22日ユーロ/ドルは1.12台後半、ユーロ/円は128円台後半でオープン。19日にオーストリアが新型コロナウイルスの感染拡大で22日から完全なロックダウンを実施すると発表したことや、ドイツでもシュパーン保健相がロックダウン再開の可能性を示唆したことが嫌気され週初からユーロは売られた。22日の米国時間にバイデン米大統領がパウエルFRB議長の続投を発表し、米金融政策を巡る不透明感の後退を好感するドル買いが入ると、ユーロ/ドルは1.12台前半まで下落した。23日はシュナーベルECB理事とクノット・オランダ中銀総裁が2022年にインフレが大きく低下しない可能性を指摘し、さらに発表されたユーロ圏11月製造業/サービス業景気指数がいずれも前月比プラスを記録するとユーロは反発に転じた。ユーロ/円はドル/円の上昇も後押しし、一時129.60円と週高値まで上昇した。ただし、24日に発表された独11月IFO景況観指数の冴えない結果に対し、米経済指標が軒並み強かったことが材料視されると再びドル買いが加速。ユーロ/ドルは一時1.1186まで下落し、2020年7月以来の安値を付けた。25日は米市場休場の中1.12台前半で方向感に欠ける展開が続いた。26日には南アフリカで検出された新型コロナウイルスの変異株の感染拡大懸念を受けドル売りに転じたことが支援材料となり、ユーロ/ドルは週高値となる1.1333まで急伸した。引けにかけて下値は堅く、ユーロ/ドルは1.13台前半、ユーロ/円はドル/円の急落を受け、128円台前半まで下落し越週した。

今週のユーロ相場は、軟調推移を予想する。欧州では引き続き新型コロナウィルスの感染拡大が懸念される。ドイツでは新規感染者数が過去最多となっており感染拡大のピークはまだ見えない。南アフリカで検出された変異株「オミクロン株」はオランダやベルギー等で感染事例が報告されており、更なる感染拡大への警戒感からユーロは売られやすいだろう。また、今週はユーロ圏の11月分の主要な経済指標が発表される。29日(月)は欧11月総合景況指数/企業景況指数、30日(火)は欧11月消費者物価指数、さらに12月1日(水)と3日(金)には欧11月製造業と欧11月サービス業景気指数。先週発表された独11月IFO景況観指数は、市場予想を下回り5ヶ月連続で低下を記録した。接客業や旅行業などのサービス業を中心に厳しい状況が続いており、さらに供給サイドのボトルネック長期化懸念は燻ぶったままである。市場予想を下回る指標が続くと、ECBはインフ レ抑止ではなく景気支援に動かざるをえないとの見方が強まる。一方、米国では3日(金)に11月の雇用統計が発表される。米雇用統計が強い結果となると欧米金融政策格差が改めて意識され、ユーロ売りが加速する展開に警戒したい。

(3)先週までの相場の推移

先週(11/22～11/26)の値動き:　(対ドル)　安値　1.1186　高値　1.1333　終値　1.1315
(対円)　安値　127.79　高値　129.60　終値　128.42



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

欧州資金部　本多 秀俊

(1)今週の予想レンジ:　1.3200　～ 1.3400　　149.90　～ 152.40　円

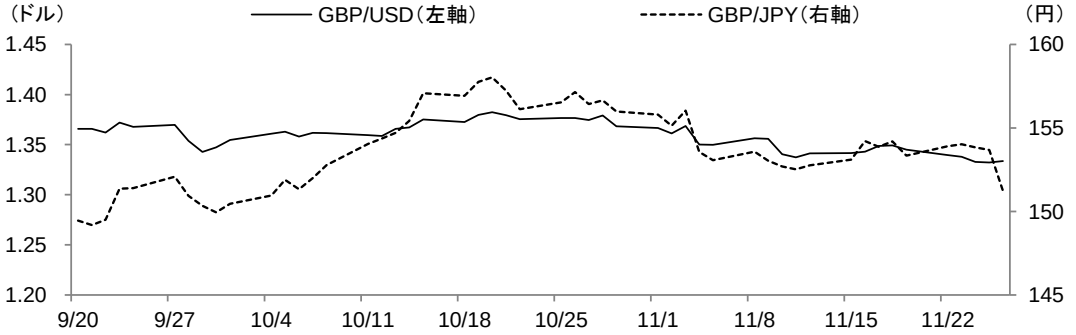
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、下落。対ドルでは、緩やかながらほぼ一方的な下落を続け、26日までに昨年12月来の安値を1.3278まで拡げた。対円、対ユーロでは、週明けから週央まで方向感を欠いた膠着を支配的としたが、26日になって明確に水準を切り下げた。対ドルでのポンド安は、引き続きドル高の裏返しと考えられた。22日には米連銀の次期議長に、パウエル議長が再指名された。同議長の再指名は市場の大半の予想したところだったものの、市場の一部には、パウエル議長以上にハト派的で、仮に指名されれば米利上げ開始のタイミングが一段と先送りされることが見込まれたブレイナード理事が指名されるとの読みもあった。結果的に、予想通りの結果ではあったものの、「利上げ先送り」の可能性が減じたと受け止められたことが、ドル全面高の背景となった。この間発表された米経済指標では、24日、週次の米新規失業保険申請件数が52年ぶりの低水準を示したことが、米労働市場の堅調な回復を示したとの読みでドル押し上げ要因と受け止められた。26日になってポンドが対円で急落したのは、南アフリカで確認された新型コロナ変異株が要因。同変異種の拡散が世界景気全般への脅威となる可能性が警戒され、株安、円高、新興国市場通貨安などといったリスク回避の動きを誘発した。同日の対ユーロでの下落の要因は定かでなかったものの、スイスフランの上昇に連れた可能性は考えられなくもなかった。フランはこの日、密接な連動を持つユーロに対して6年4か月ぶりの高値を更新したが、リスク回避の安全通貨との認識に加え、同国物価が足元明確な上昇基調を維持していることで、スイス国立銀もフラン高に寛容ではないか？ との読みがフラン上昇の背景にあったようだ。

今週の英ポンド相場は、方向感を欠いた膠着を予想。敢えて選ぶならポンド軟調を警戒する。米連銀利上げ前倒し観測を追い風としたドル高は、現在まで収束する気配を見せないものの、先週25日の米感謝祭休日を経て、米機関投資家などの活動が年末まで小休止する可能性は考えられる。とりわけ今週は、3日（金）に米11月雇用統計発表を控え、金融市場全般に様子見気分が広がる可能性は高い。対ドルでは、2019年12月と9月に天井を打って反落した1.35水準を、先週、明確に割り込み、テクニカルにもう一段の安値を見極めにいく可能性は考えられるものの、対円、対ユーロなどでは中途半端な水準にあり、そうした方向感は読み取れない。ポンド軟調を中心に見込む理由はふたつ。ひとつは、12月16日（木）の金融政策委員会に向け、英中銀利上げ観測が萎む可能性。英10月CPIや同小売売上高などの上振れを受け、再び盛り上がった同利上げ観測だが、新型コロナ変異株の出現で、また先送りされる可能性が高まっているのではないか。先週は、ベイリー総裁、ピル委員/チーフエコノミスト、ハスケル委員、テンレイロ委員などが発言する機会があったものの、共通したのは「データ次第」という点で、とりわけ一時帰休制度が廃止された10月以降の英労働市場の動向を見極めたいとの思惑が強いようだ。もうひとつの理由は、英政治動向。同僚議員をかばうため、議会独立委員会の決定を蔑ろにする制度改革を打ち出したり、一部の所属下院議員が国会内から弁護士としての副業を営んでいた事実が発覚したりして、ジョンソン首相と与党保守党に対する世間の風当たりは強い。そこに輪をかけたのは、英仏海峡をボートで渡ろうとした移民（27人）が溺死したという事件（25日）。英政府と仏政府はお互いを非難し合っており、どちらが意固地とか、どちらが非建設的とか議論は置いておくとしても、英仏関係が悪化しているのは紛れもない事実。こうした状況は、英企業/消費者の信頼感にも少なからず悪影響するであろうし、ひいては英経済にとっても成長阻害要因になることが警戒されよう。

(3)先週までの相場の推移

先週（11/22～11/26）の値動き:　（対ドル）安値 1.3278　高値 1.3449　終値 1.3330
（対円）安値 150.73　高値 154.22　終値 151.23



（資料）ブルームバーグ

4．豪ドル

アジア・オセアニア資金部　シドニー室　川口　志保

（1）今週の予想レンジ：　0.7000　～ 0.7320　　79.30　～　83.00　円

（2）ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

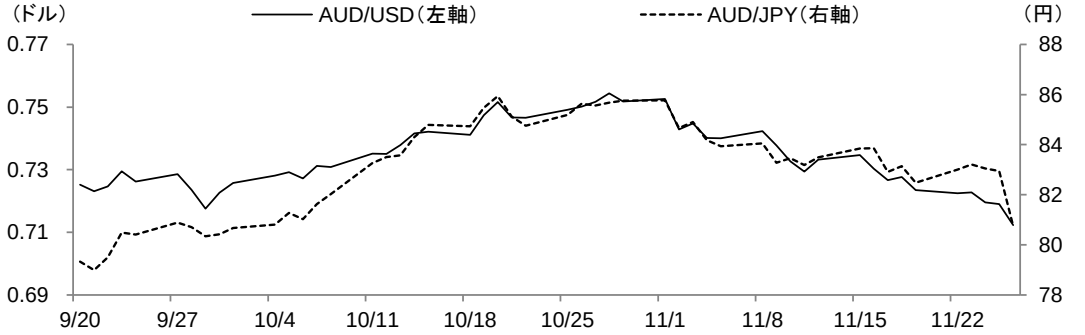
先週の豪ドルは週初から欧州各国での新型コロナ感染拡大による経済回復減速懸念を背景に0.72台前半から0.71台前半へと下落した。月曜日は0.72前半から0.72後半へ行ってこい。米国ではバイデン大統領が複数国と強調し戦略石油備蓄を放出の意向を示したことで原油相場に売りが強まり、カナダや豪ドルなどの資源国通貨の重しとなった。火曜日は1日を通して0.72台前半で終始。安値は0.7207まで更新した。豪11月PMI（速報値）はサービス業、製造業、コンポジットの全てにおいて2か月連続で景気判断の境目である50を上回り、景気拡大を示した。また石油備蓄放出については開始されたものの、放出量の大部分については将来石油備蓄に返還することを義務付けている事に加え、放出規模が予想を下回ったため原油価格が上昇した。これらを背景に豪ドル下値が支えられた。水曜日は0.72台前半から0.71台後半まで下落。RBNZ理事会では市場予想通り政策金利を0.25%引上げ、0.75%とした。既にこの25bpsの利上げは広く織り込まれていた為、利上げ幅が50bpsでなかった事に対して反応しNZD売りでポジション調整が進んだ。豪ドルも連れ安となり、0.72台割れ。木曜日は米国感謝祭祝日で薄商いの中、安値を0.7180まで更新したものの、1日を通しては30pipsのナローレンジで推移した。但しその中でも0.7180まで下落し3度下抜けがくい止められていた。金曜日は0.71台後半から0.7113まで下落。豪ドル/円は83円から80.48円まで下落した。南アフリカで発見された新型コロナ変異株「オミクロン株」が香港やシドニーでも南アフリカからの一部の入国者から検出されたことで、アジア株は重く推移した。経済回復の腰折れ懸念を背景に朝から米10年債に継続的な買いが入り利回りは1.47台割れまで下落。NY時間では米株売りとなり豪ドルは0.7113まで下落し、8月20日（金）に付けた年初来安値の0.7106目前となった。シドニー時間に発表された豪10月小売売上高は前月比+4.9%（予想2.2%、前回1.3%）と経済回復の力強さを見せたものの、燻る変異株懸念で先行き不透明感から特段の反応は見られなかった。

今週は引き続きオミクロン株感染拡大の行方に注目が集まる他、12月1日（水）に豪7～9月期 GDP、中国11月製造業PMI、2日（木）に米11月ADP雇用統計、米ISM製造業、豪10月貿易収支、3日（金）に豪11月PMI（確定値）、中11月PMI、米国時間に米11月雇用統計が発表される。各経済指標でここまでの経済回復基調は確認されたとしても、経済回復が腰折れするのではとの不安感が燻る中では豪ドルは頭を抑えられるとみる。年初来安値0.7106を下抜けすると心理的節目の0.70が目前に迫る。また、円やスイスフランが逃避買いされている事から豪ドル/円に関しても10月安値を下抜けし79円台へ下値を広げると予想する。今週末発表予定の米11月雇用統計に関しては引き続き順調な雇用回復が予想されている。12月のFOMC理事会で議論されるとみられているテーパリングペースの加速を正当化するような結果となればこちらも豪ドルの重しとなろう。

（3）先週までの相場の推移

先週（11/22～11/26）の値動き：　（対ドル）安値　0.7113　高値　0.7273　終値　0.7114

（対円）安値　80.48　高値　83.25　終値　80.76



（資料）ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようにお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。